RISE!

桶明日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
RISE!

【Nコード】
N5259Y

【作者名】
桶明日

【あらすじ】
広大なる宇宙を旅するステーションに住まう少年と、彼が遭難した通称“黒の星”で暮らす少女の物語。
最先端の技術を駆使し、快適な環境を約束された人工星(ステーション)で住まう少年——タールオと、神を信仰し原始的な生活を送る黒の星の少女が出会うとき、歴史の紐が解かれる。

1

人は常に上を上を目指す。空に憧れを持ち、そこに広がる天に思いを馳せる。

けれど、天は神々の領域。そこに足を踏み入れるは、罪。

その昔、天に住まう神々は人を見捨てた。

嘗て人は己の力を過信し、自らを神と同等と考えた。神々は怒り、人に裁きの鉄槌を下した。

花々が咲き誇り、沢山の実がなり、動物達が生きていた地は、枯れ果て生命の乏しい荒野と化した。

澄んだ空気には熱く乾いた砂塵が混じり、人の皮膚を灼き裂いた。

母なる海は昔日(せきじつ)の蒼さを失い、黄土色に淀んだ。

喉を潤す水は毒におかされ、乾きに飢え、たまらず口に含んだ人や動物の命を奪った。

そうして、この世界は人どころか動物すらもまともに生きることのできない世界へと変貌した。

人はそこで初めて自らの罪の重さを自覚し、後悔し、そして嘆いた。神に許しを請うた。

だがしかし、神の救いは訪れなかった。故に、人はその死んだ地で生きることを余儀なくされたのだ。

贖罪の術(すべ)を模索し、ひたすら神に祈り続け、己の種族の思い上がりを恥じ、謙虚に敬虔に日々を送った。

いつの日か、再びこの世界に楽園が拓かれることを信じて。

人がそういう生活を送るようになってから、百年の時が経つ。

長きに渡る世界の歴史からしてみれば、ほんの一瞬。

けれど、人が嘗ての罪なるできごとを、遠くまるで実感が沸かないようになるには、充分な時間。

そんな時が過ぎてなお、未だ楽園は人々の上に光臨する気配の片鱗すら見えなかった。

「……んっ」

その暗い室内で、スゥラ・シャトーは短い声を上げた。彼女は顎を上に向ける。村娘の誰もが羨む、長い黒髪がさらさらとした音をたてた。

スゥラの髪は奇跡と言われている。その艶のある黒は、神がこの世界を捨てたときに、失われた色だった。腐敗した匂いを撒き散らす風と、毒を孕んだ食べ物に甘んじる人間は、摂取するものが体に反映され、遥かなる過去のような鮮烈な色彩を纏うことはなくなったとされていた。しかし、スゥラの黒炭のような髪は、明るく光を弾き、見る者をはっとさせる。

そして彼女の持つ美しいものは、髪だけではなかった。

その面（おもて）に嵌（はま）った、一対の宝玉――祭壇を飾る黒曜石の如くと称される、濁りなき瞳。その瞳は、今は戸惑いのために揺れていた。

「変化」

白く細い喉から、潤った声が漏れる。空気は柔らかく振動し、甘い響きがその場に広がった。だが、彼女自身はその自覚はない。色のある息を呑み、手元を凝視していた。

彼女の手元には、無数の硝子玉が転がっている。美しいものが殆ど失われてしまったこの時代に、硝子玉は高価なものであったが、それは彼女だからこそ持ち得るものであった。

この硝子玉は卜占（ぼくせん）に用いられている。或いは、怒れる神々の魂を鎮めるためにも。そしてその役割は、代々村長（むらおさ）が執り行っていた。何故なら、村長は村の巫覡（ふげき）の役目もまた、担っているからだ。男なら覡（おかんなぎ）、女なら巫（めかんなぎ）として、神の御霊を凪ぐ。即ち神凪（かみな）ぐのである。

そしてスゥラは十六という若さにして既にこの村の長（おさ）であり、巫（めかんなぎ）でもあった。つい先日、先代の長であった彼女の父親が身罷（みまか）ったのだ。原因は壊気（かいき）病――ここの風土を多う汚れた空気を吸いすぎたために、肺を患ったのだ。その病は決して珍しいものではない。むし

ろ逆に、ごくありふれたものだった。恐らく、ここに住まう人間の殆どが、この病を患っている。現にスゥラも数年ほど前から、やたらと咳が出るようになっていた。今でこそ、その若さからくる生命力で、なんとか病を押さえつけているものの、治療が必要になってくるまで、さほど年月はかからないだろう。

　そして、この地に住まう人間の死因は、壊気病が圧倒的に多かった。遅かれ早かれ、誰もがこの病に負けて死ぬのだ。それは当たり前のことであり、神が人に下した罰の一つでもあった。

　スゥラの父は享年四十五だった。それは平均寿命よりは五年ほど短いが、誤差の範囲内だ。壊気病の進行具合は、その人間が外でどれだけ空気を吸ったか、そして外を流れる瘴気（しょうき）にどれだけ耐えられるかによる。従って、個人差が大きい。スゥラの父の場合は、どちらかというと、前者だった。彼は空を眺めることを好んだ。

　嘗ての罪のために、人が天を望めぬよう、神々は天を隠してしまっていた。だから今は、天は混濁した層に覆われており、時折、思い出したように黒い氷の破片が降る。

2

それなのに、父は何を考えていたのか、外で常に頭上を仰ぎ見ていた。スゥラは勿論、それを嫌がった。その昔の自分たちの祖先は、天を手中に収めようとして罰を受ける羽目になったのだから、不吉だからやめろと、何度も訴えた。それでも父はやめてくれなかった。そして、死んでしまった。だから、スゥラはほんの少しだけ父に含むものがある。まだ本心は誰かに頼りたくて仕方ない子どもな自分を置いていき、かつ自分を村長にさせてしまった父を、ちょっとだけ恨んでいる。

　でも、死んでしまったのだから仕方ない。それはとても悲しいけれど、悲しんでばかりはいられない。荒野に寂しく存在する村は、新しい村長を、神の声を聞く巫女を欲している。だから、スゥラが頑張るしかないのだ。

　スゥラは青の硝子玉に手をやる。外の荒れた空気に晒されてもなお、白さと清潔さを保っている若々しい手が、硝子玉に触れる。彼女はそれを指で弾いた。

　硝子玉は薄暗い室内で、淡い青の光の筋を描き、ゆるやかに転がる。そして白く磨き上げられた獣の骨にぶつかり、方向転換をして、赤の硝子玉にあたった。青い硝子玉が、反作用で僅かに転がったが、そこで止まる。しかい赤い硝子玉が、今度は転がり始める。それは何の障害物もない道を選んだように進み、やがて赤の二重円が描かれたその中に入る。その動きが、スゥラには酷くゆっくりしたもののように感じられていた。そしてそのまどろっこしい時間が過ぎ去ったとき、赤い硝子玉は円の中心に位置していた。

　スゥラは再度、息を呑んだ。

「天から、変化が訪れる」

　こんな占手（うらて）が出たことは未だ嘗てない。確かに、スゥラはまだ巫女としてはそれほど、年数を積んではいないけれど、それでも父も、

その前の祖母の代もこのような占手が出たことなど、聞いたこともない。

スゥラは立ち上がり、奥の部屋に入る。暗く湿り気を帯びたその室内には、山のように書物が積まれていた。

その多さに圧倒されていたが、意を決してスゥラは書物の中に飛び込む。そしてそこから更に数多くの古びた本を選び取り、床に広げた。

記されてあるのは、世界の地図や天体図。そして、眩暈がしそうになるほど、書き連ねられた数多くの計算式。

彼女はそれを慎重な面もちで読み解き、複数の地図を並び替え、数字や記号と睨めっこをしながら、石墨を走らせた。よれよれの皮紙に、物凄い速度で数字や記号や図形が走り始める。長たるもの、村の誰よりも知識が豊富で、頭の回転が早いのは当たり前。幼い頃から、徹底的に教育されてきたスゥラは、計算式を解き、その答えを導き出す。

たった今、占手に出たことを、確認するために。

それは、先代の覡（おかんなぎ）である父が残した、未来を予言する暗号。その中の一つに思い当たるものがあったから、スゥラはこうして計算している。

そして、答えは出た。

「四九五〇年、七の月」

スゥラは動悸が速くなるのを感じる。

それは今の時期を指している。

父の予言によれば、この時期に天から使者が訪れるという。

そんな、まさか。自分の代に、こんな一大事が起こるなんて。

「スゥラ、どうしたの、スゥラ」

彼女が先程までいた部屋から、女の声がして、スゥラは慌ててそちらを振り返った。部屋の中の蝋燭の光に照らされて、一人の中年の女が、薄い掛け布団を剥いで身を起こしていた。

「お母様」

スゥラは、計算紙をほっぽり出して、慌てて母に駆け寄る。
「ごめんなさい、お起こししてしまいました」
すると、病を患う母は弱々しく首を振った。
「いいの、いいのよ、スゥラ。いつも寝てばかりでは、体だけではなくて心も弱ってしまうわ」
母はそう言って笑って見せたが、口許は微かにしか動かない。その唇の青さに、スゥラは眉を顰めた。
父がこの世を去ってから、母もまた急激に弱った。昨日よりは今日、というふうにその変化は激しい。きっと、今日よりは明日、顔色は悪くなり、四肢は愚か顔にも力が入らなくなるのだろう。
「お母様、実は神託が下ったのです」
不吉な考えを振り払うように、スゥラは早口で捲し立てる。すると、母の眉が少しだけ動いた。それを見て、スゥラは心の奥が、ほっと安堵するのを感じる。
「あらまぁ……。それはいいものなのかしら？　それとも悪いもの？」
「まだ、そこまでは分かりません。けれど、天の使者がくると。お父様と同じ予言です」
父は嘗て、天を見てその予言をした。そして暗号として、その時期を遺した。
そして娘である自分は、代々伝わる板に沿って並べられた、硝子玉よりそれを予言した。
良いものにせよ、悪いものにせよ、何らかの変化が訪れる。

3

　もしかしたら、と、スゥラは思った。
　そう、もしかしたら、自分たちの祈りが通じて、神がやっと人を赦して下さる気になったのかもしれない。天の使者は、楽園の復活を告げる者なのかもしれない。
　そう思うと、胸が高鳴った。
　そしたら、母の病も治るかもしれない。自分も、この小さすぎる手には重すぎる責務から、開放されるかもしれない。
「天の使者ですもの、きっといいことに違いありません」
　やや上擦った口調で、スゥラが言ったその時のことだった。
「スゥラ様！」
　彼女を呼ぶ声が、響いてくる。
　スゥラは小さな身を、びくりと震わせて背後を顧みる。奥の通路から、倒けつ転びつしながら、一人の女が駆けてくるところだった。侍女にして乳姉妹のサーカラだ。彼女は転がり込むようにして、部屋に入った。
「ご無礼を承知で失礼します！」
「どうしたの？」
　よっぽど急いできたのか、サーカラの息は荒い。スゥラは杯に水を注いで、彼女に手渡した。サーカラは短く礼を言い、一気に飲み干すと口を開いた。
「大変です、お客人です」
「客人？　どこから？」
　汚染された外気の中を好んで歩く旅人はいない。この小さな村の他にも、どこかに集落は存在しているのだろうが、滅多に触れ合うことがない。旅人という者に出会ったのは、まだスゥラが幼い時に一度だけだった。
　だから、サーカラが客人の訪問に驚く気持ちは分からないでもな

い。
「それが、その……天から落ちてきたのです」
「は？」
スゥラの目が点になる。乳姉妹の答えは、彼女の予想を遙かに超えていた。
「大きな光る球が天から落ちてきて、そ、それで落ちた場所に行ってみましたら、中に何者かがいたのです」
スゥラは目を見開いた。同時に、傍らで母が身動きする気配がした。

――天から、変化が訪れる

それは三十年前、父が予言したもの。
そしてたった今、自分が予言したもの。
当たった、当たってしまった。
天の使者が、本当にこの地に来てしまったのだ。
人間の滅びを宣告しにきたのか、それとも繁栄を約束しにきたのか。

だが。
ちらと、スゥラはもう一つの可能性を考えていた。それは、代々村長にだけ受け継がれてきた、昔の罪に関わる秘密。
「そのお客人はどちらへ？」
「離れに運ぶように命じてあります」
「今、行くわ」
スゥラは立ち上がった。すかさず、サーカラが戸棚から、仮面と手袋、長靴、ケープを手渡す。ここの外の空気は瘴気（しょうき）に満ちている。こういったもので防護しなければ、たちまちのうちに、病の手が皮膚や肺に伸びてくるのだ。サーカラは慣れた仕草で、主（あるじ）の外出の支度を手伝う。そして自分も、脱いでいたそれらを身に纏（まと）った。
「お母様、行って参ります」

サーカラの支度が整ったのを確認し、スゥラは母に声をかける。
母は弱々しく頷いた。それから目を背けるようにしながら踵（きびす）を返し、彼女は自室でもあり、祭壇でもある部屋を後にした。

＊　＊

向かった離れの小屋の入り口は、既に集まった野次馬で埋め尽くされて見えない状態だった。誰もが、天から落ちてきた謎の者に対する好奇を隠そうともせず、興奮している。
その中の一人が、スゥラの訪問に気付き、声を上げた。村で一番美しく——とはいえ、今は防護の装備で覆われていて、その美しさは表には出てはいないが——気高く、そして神に見放された世界で、唯一神に愛を受けているとさえ囁かれている村長（むらおさ）の登場に、周囲はざわめいた。
「天から人が落ちてきたと聞きました」
耳にするだけで惚れる者もいるという美声を、スゥラは惜しげもなく響かせる。すると、村民は口々に肯定した。
「突然、空が光ったと思ったら」
「大きな音がして」
「光の中から人が」
「いえ、本当に人かも分かりません」
スゥラは実年齢よりは大人びて見えるよう、鷹揚に頷いてみせる。それは、物心ついたときからのスゥラの癖のようなものだった。
誰よりも利発にみえるよう。
誰よりも昂然としているよう。
時期村長と決められていた彼女は、そうやって常に己を律してきていた。そしてそれは長い年月をかけて確かに彼女の身に付き、周囲を圧倒させるに充分な力を持っていた。
「その者に会ってみたい。通して下さい」
村民はすぐに道を空ける。その中を背筋を伸ばして歩き、スゥラ

は通る。後にはサーカラが続いた。
　入り口をくぐると、真っ先に目に映るのは壁だ。中は人二人がやっと入れるほどに狭く、そして分厚い壁で覆われている。床からは筒のようなものが飛び出して、その筒の奥が回転し、何重にも膜が張られていた。この筒でもって、地下の部屋の空気を浄化しているのだ。
　サーカラが床に生える取っ手を持ち上げる。現れたのは地下へと続く梯子。スゥラとサーカラの二人はそれを降りていった。

4

この地域の家は、大抵、地の上に飛び出た部分は、鉄の壁で覆われ、そして室内は地下にあるのだ。しかしこのように厳重に囲っていてさえ、外界の汚れた空気を完全には遮断することはできないのだ。

梯子が尽きたところで、更に斜面になっている廊下に出る。二人はそこを下っていった。ややあって、拓けた場所に出る。そこがこの離れの部屋だった。

「村長様」

中にいた初老の男が、畏(かしこ)まって姿勢を正す。平均寿命が五十のこの世界では、長生きをしている方だ。この村では医師を務めていた。

そして、彼の目前には横たわる青年がいた。スゥラは片膝をつき、そして青年の顔を覗き込む。——続いて、その綺麗な容貌に素直に驚いた。村の娘ですら、こんなきめ細かな肌を持ってはいまい。だが、外気に晒されたためか、ところどころに発赤(ほっせき)が生じている。閉じられた瞼を縁取る睫毛は長く、欠けたところが一つもない。髪は赤い色に抜けてはいるが……。

スゥラはその硬質な髪に手を伸ばし、掬い上げた。

根本は黒い。これはわざと不健康そうに見えるよう、染めているだけだ。その意図は分からないが。

間違いない、こんな完璧な者が人間(ヒューマン)であるはずがない。これは間違いなく、スゥラの知らない世界から来た者だ。

「容態は?」

スゥラは医者に尋ねた。

「暫く瘴気(しょうき)を浴びたせいでしょう、喉と目が灼けているようですが、程度は軽いです。養生すれば、程なく回復しましょう」

「そう、それは良かった」

スゥラは続いて、部屋の隅に置かれてある、奇妙な物体に目をや

った。その物体は数カ所ほど焼け焦げていて、煤がこびり付いている。真ん中の透明な硝子のような部分に、大きな亀裂が入り、その透明部分の向こう側には、椅子のようなものと、スゥラには理解できない細かな絡繰り道具のようなものが見えた。

「あれは？」

「この者を容れていた箱でございます」

「……そう」

　それを聞いて、スゥラは悟った。天から落ちてきた者の正体を。初めにサーカラから報告を受けたときに、頭を掠(かす)った勘は正しかった。それは村長に代々言い伝えられてきた、この世界の廃退にも繋がる天のこと。

　医者の隣に、ちょこんと可愛らしく座っていた少女が、大きな瞳をくるくるさせながら、声を上げた。

「天使様でしょう、村長様！」

「これ、ハニヤ」

　医者がそれを窘(たしな)める。この少女は、医者の孫だった。

「よい」

　スゥラは手で制し、そしてハニヤに向かって微笑んで見せる。

「そうよ、天使様よ。ハニヤがいっぱいお祈りしてくれるから、それを褒めに降りてきて下さったの。目が覚めたら、いっぱいお世話してさしあげてね」

　ハニヤの顔いっぱいに、笑顔が広がる。どこか罪悪感を覚えながら、スゥラは彼女の頭を撫でた。

「リィオルト、治療を頼みます。また様子を見に伺います」

　医者に告げ、スゥラは立ち上がる。医者が深々と平伏したのが、視界の片隅に映った。

　スゥラが部屋を出ると、当然のようにサーカラがついてきた。

「スゥラ様、本当にあの者は天使様なのですか？」

　サーカラの声は、驚きのあまり掠れている。対して、スゥラの声は冷めていた。

「村の者にはそう伝えてちょうだい」
「え？　スゥラ様？」
早足で歩くスゥラを、サーカラが慌てて追う。だが、スゥラは足の速度を落とそうとはしなかった。
ただ、彼女の頭にあったのは、天から落ちてきたというあの青年。
あれは、天使ではない、天使などでは有り得ない。
良い者ではない。悪い者でもない。
敢えて言うなれば、運に恵まれない者だ。そんな希有な者が、自分が村長を務める代になって、落ちてこようとは。或いは、運がないのはこの自分か。
「どうしたもの」
知らず、呟きが口から漏れる。
こんなことは前例がない。頭では知っているつもりだったけれど、本当に存在するとは知らなかった。
これから、どうやって対処していけば良いのだろう。この村よりももっと、設備に恵まれたよその村を探して、助言を求めるか。
そう考えて、しかしスゥラは首を振る。
よそに村があるのは確かだが、どこにあるのか不明だ。むしろ、そんなところまで、誰が行くというのだ。
「どうしたもの」
彼女の小さすぎる愚痴は、やや後ろを歩くサーカラの耳に届くこともなく、虚しく宙に溶けて消えた。

1―1

「ない、ない、ない……」
沢山のパソコンが並ぶその一角で、一人の少年が画面にかじりつき、悲痛な呻き声を上げていた。
「ない、ない、ない、なあああああああああああい！」
最後の『ない』の叫びがあまりにも大きかったために、同じようにしてパソコンで作業中だった人間が数名、彼を振り返る。だが、彼は周りの迷惑そうなその様子に、全く気を払わなかった。否、そんな心の余裕を持たなかった。
「はい、三浪決定ー」
絶望に頭を抱えている少年の背後から、また別の声がかけられる。少年は反射的に振り返り、声の主を睨み付けた。
「ガジェス！」
「どうどう、俺に怒るのは間違ってるぜ。俺は現実を言ったまでだ」
ガジェスことガジェス・チク・ドウシヤは、憎たらしいにやにや笑いを浮かべている。彼の目は白目がなく、全てが瞳。その普段はアーモンド型の瞳は、今は邪気のある笑みのために、細められている。それが少年――タールオ・アルス・デドセンの神経を更に逆撫でた。
「お前なぁ、それが落ち込んでいる奴にかける言葉か？」
「あれ、落ち込んでるのか？　落ちたのもう三回目だろ？　いい加減、慣れたんじゃないのか？」
薄ら笑いを見せるガジェスの顔のすぐそばを、ペンが一直線に飛ぶ。彼は咄嗟に、それを掴んだ。
「おいおい、物を人に向かって投げたらいけないって、小さい頃教わらなかったか？」
「……お前は口は災いの元って諺を、小さい頃教わらなかったんだな」

タールオは低く凄んでみせたのに、対するガジェスはそれを呵々と笑って受け流した。

「どうやら、そうらしい。よく言われる」

「お前、ほんっとその性格直した方がいいぞ」

そう吐き捨てて、タールオは再びパソコンの画面と向き合う。そして、つい先程自分が目当ての番号を見逃しただけなのではないかと、微かな期待を込めて、画面を流れる数字を追った。

タールオ・アルス・デドセン、現在、十八歳。幼い頃から神童と呼ばれていて、自分でも自分のことを賢いと思っていた。実際、周囲は自分よりも頭の悪い奴ばかりだったし、小・中等科学校でも主席を保持していた。そして、十三歳の時に、学園星（スコルスタ）の一つであるドットリアンにあるドットリアン高等科学校に進学。ドットリアン高等科学校は四年制だが、タールオは自他共に認める秀才だったから、飛び級で十五歳で卒業した。その後、今タールオがいるこの学園星（スコルスタ）——バージーに移り、大等科学校に進学すべく、バージー予備校で勉学に励むことを決めた。基本的に、高等科学校を卒業してからすぐに大等科学校に進む者はいない。まずはどこかの星の予備校で、己が目指す大等科学校の試験に合わせて、勉学に励むなり実技を磨くなりするのが常だった。そしてタールオもまた、その例に違わず、バージーでひたすら勉学に打ち込み、また実習に積極的に取り組んで、切磋琢磨してきた。

が、ここでタールオの明るい輝きに満ちた未来像は、打ち砕かれることになる。十五歳でバージーに移り住んで以来、この星から出られないのだ。——即ち、大等科の試験に三回連続で落ち続けているのである。

十六の時に初めて試験に落ちたときは、周囲から慰められた。初めての大等科試験なのだから、慣れないことも沢山あったせいで仕方ないのだろう、と言ってくれた。そして自分もそう思っていた。実力をまだ出し切れていないだけなのだと。

十七の時に落ちたときは、誰もが気まずそうに目線を逸らした。

その癖、同情の眼差しをいつも肌に感じていた。知り合いはそれぞれ大等科に進学してしまい、少なくなった。
　そして今回、十八で落ちて屈辱に打ち拉（ひし）がれている。
　なおも諦めきれずに、パソコンの画面から自分の受験番号を探していると、ガジェスから肩を叩かれた。
「往生際の悪い奴だな。……大体、何だってボルフリアなんて狙ってんだよ。もうちょっとランク落とせば、お前なら合格するだろ」
　タールオは、この台詞を無視した。
　彼の狙っているボルフリア大等科学校は、名門の一つである。卒業生はエリートの道が約束されており、将来の保証もある。ボルフリア卒なんて言ったら、世間の者は目を回すのが当たり前だ。
　誰もが憧れる、名門学校。秀才たる自分が行かざるして、誰が行くというのだ。
　自分が試験に落ちる理由は、きっと一つしかない。ボルフリアの講師の見る目がないのだ。
「親から言われたわけでもなし。それなのに、毎日毎日、貴重な青春の日々を勉学に費やす、その志は殊勝だけれど、お前もうちょっと現実を見……ってぇな！」
　ガジェスは肘でどつかれた脇を押さえる。そして、タールオを睨み付けた。

1—2

タールオはそれに負けじと言い返した。
「お前はもうちょっと、その口を閉じろ。……そう言うそっちはどうなんだよ」
訊いてから、後悔した。見る間にガジェスの口許に、勝ち誇ったような笑みが広がったからだ。
「勿論、合格したさ。もっとも、お前ほどレベル高いところ狙ってたわけじゃないけどな」
「そりゃそうだ、俺はお前より頭がいいんだから」
ガジェスは眉を上げて、一瞬、押し黙る。そして徐（おもむろ）に口を開いた。
「なぁ、タールオ、お前さっき俺に性格をどうかしろ云々（うんぬん）言ったが、俺もお前の性格はどうかと思うぞ」
「仕方がない、類は友を呼ぶって奴だ」
「成る程、それもそうか」
ガジェスは青みがかった牙のような歯を見せて、笑った。
彼はタールオとは銀河団を異にする星の人間だ。同じ銀河団に属する種族は、どういうわけか似たような容姿をしているが、しかし、違う銀河団の場合は、外見もまた異なってくる。従って、タールオとガジェスもまた、異なった種の容姿をしていた。タールオの肌は白とも赤とも黄ともつかぬ、実に曖昧な肌色で、そして髪は細いものが頭皮から無数に生えていたが、ガジェスの肌はその歯と同じように青みがかっていて、さらに髪は太く捻れたものが数十本ほど、頭から垂れ下がっているのみだ。極めつけはその目だ。ガジェスの目は白目が外からは見えない構造になっていて、見る者によっては不気味な印象を与えるらしい。もっとも、タールオはガジェスと幼い頃からの馴染みであり、かつガジェスと同じ銀河団の人間との付き合いもあったので、特に何も思わなかった。
違う銀河団の種族であるタールオとガジェスが幼馴染みであるの

は、二人とも人工星（ステーション）で生まれ育ったからだ。この広い宇宙には、たまにそういう人間達がいる。己の故郷である星を知らず、放浪する者達が。ガジェスの場合は、彼の両親が故郷星（コウットスタ）であるチク――名前の真ん中にある称号は、その種族が生まれた星を示していた――から、仕事の都合上、人工星（ステーション）に移り住んだと聞いている。一方、タールオは自分の星を本当の意味で知らなかった。自分の名前の中にあるのだから、故郷というべき星がアルスであることは知っている。しかし、それがどんな星であるのかは知らない。生まれ育った人工星（ステーション）からはよっぽど離れた距離に存在しているのか、話題にならぬほど小さな星なのか、或いはその両方か。タールオの両親がアルスについて話すことはなかったし、またタールオ自身も自分の故郷は人工星（ステーション）セジアルドだと思っているから特に興味もなかったので、聞いたことはなかった。たまに知り合いにアルスについて知っているか、と気紛れに尋ねてみたりすることはあったけれども、誰もがそんな星は知らない、と残念そうに答えた。もしかしたら、遠い昔に星の寿命が尽きて爆発してしまったのかも知れない。

「ああああああ、やっぱり、ない……」

タールオはパソコンの前で、もう一度、頭を抱えた。

何度も何度も見飽きた画面を見ていたが、そこに自分の受験番号を見出すことはできなかったのだ。

ガジェスは、溜息を吐（つ）く。

「ま、仕方ないさ。あと一年、また頑張れ」

何でもないことのように言われ、タールオは自分の友人に鋭い目線を投げた。

理不尽だった、理不尽なことこの上なかった。

タールオは優秀だった。幼馴染みのガジェスよりも、ずっとずっと優秀だった。だからガジェスが入学した高等科学校よりもずっとレベルの高い学校に進学して、かつ飛び級で卒業できたのだ。

にも関わらず。

タールオがこのバージー予備校で足止めをくらっている間に、ガ

ジェスは高等科学校を卒業して、同じバージーにやってきた。そして今度は、タールオを置いてさっさと大等科学校に進学しようとしている。

　納得できない。

　それに。今回、落ちるということは重さが違うのだ。

「簡単に言うなよ。今回が駄目だったら、仕送り打ちきられるんだよ！」

　切実な問題だった。世の中は金だ。金がなければ生活はできない。当然、勉強することもできない。

「バイトして働けばいいだろ」

　自分はもう進学が決まっているガジェスは、事も無げに言う。それが尚更、腹が立った。

　それが容易なことなら、こんなにも思い悩むものか。バイトするということは、時間が削られるということだ。特にタールオの場合、生活費、学費共に稼がねばならないから、労働時間は半端なものではないだろう。そして時間が削られれば、勉強する暇がなくなる。

今まで時間を惜しんで勉強してきたのに、三連続で落ちたわけだから、バイトを始めればどうなるか。そんなことは目に見えている。

タールオは学園星（スコルスタ）バージーから永遠に出られないだろう。

「あああ、もう！」

　タールオは乱暴に頭を掻きむしる。

1―3

周囲で勉強している人間が、咳払いをしたが、タールオは全くそれに気付かなかった。

ガジェスは、先程自分に投げつけられたペンで、からかうように幼馴染みの額をぺちぺちと叩いた。

「そもそも、何でボルフリアの大等科学校にそこまで拘（こだわ）るわけよ？　何かボルフリアで学びたいことでもあるの？」

「そんなの決まってるだろ」

何でそんなことも分からないのだ、と言わんばかりに、タールオはやれやれと肩を竦（すく）めてみせる。

「俺様が頭がいいからだよ」

それは至極当然の理由だった。才能は有効活用されねばならない。賢い自分が、名門ボルフリアに進学するのは、この世の理（ことわり）とでも言うべきことだろう。

だが、凡人であるガジェスにはそれが理解できなかったらしい。まじまじと、タールオの顔を見ていたが、やがてそのアーモンド型の目に哀れむような光が宿った。

「……俺、今分かったわ」

「やっと分かったのか」

――俺がボルフリアに行く道理が、とタールオはそう続けようとしたのに、それは遮られる。

「お前、実は馬鹿だろう」

「ああん？」

「人工星（ステーション）セジアルドに帰って働けよ。金、ないんだろ」

沈黙の帳（とばり）が二人の間に落ちる。だが、それは一瞬のこと。

その一瞬の後には。

「馬鹿はそっちだ、馬鹿野郎！」

タールオの罵声が響き渡り……そして。

彼は周囲で静かに自習をしていた学生らから、「しーっ！」と怒りに満ちた指を立てられたのである。

2―1

タールオ・アルス・デドセンは不機嫌だった。そしてそれを隠そうともせずに、露骨に眉間に皺を寄せて、足音も乱暴に空中回廊を歩いていた。

彼は結局、自分の生まれ故郷である人工星（ステーション）セジアルドに帰還し、両親にあともう一年、仕送りを頼んだのである。だが、交渉は決裂に終わった。三度に渡る大等科試験失敗に、家族は冷たく、必死の懇願も一蹴された。彼の父親は一言、こう言った。

『進学する気がないのなら、働け』

その時の、いかにも頑固そうな父親の面構えを思い出し、タールオの中で怒りが爆発する。

「だあああああ、あのクソ親父！」

タールオは握り拳を、壁に力任せに叩きつける。ばぁん、という反響音が周囲に広がり、通りすがりの人間が、ぎょっとしたように彼に視線を投げかけていった。

「……いってぇ」

打ち付けた拳の底から、じんじんと痛みが這い上がってきて、タールオはそのまま、ずるずるとその場にしゃがみ込む。我ながら情けなかった。

進学する気がないのではない、ボルフリアの連中の見る目がないのだ。こんなに優秀な自分を入学させないなんて、どうかしている。そして両親もやっぱりどうかしている。こんなに若さと才能に溢れた息子が、エリートへの道を目指して頑張っているというのに、その前途を閉ざすとは。

この広い大宇宙は、愚かなる大人達のために、有望な人材を一人、失ってしまったのだ。

「働きたくねぇよお」

哀れっぽい声が、タールオの口から漏れる。

自分が目指しているのは、光溢れるエリートの道だ。誰もが憧れ、そして羨みの目で見る輝かしい世界だ。

なのに。

このまま、大等科学校に進学せずに働き口を探そうというものなら、その描いていた未来は実現することはないだろう。父親のように、いつも疲れたと愚痴を零しながら、安い給料で、一度しかない人生を削っていくのだ。それは何と惨めな一生であることだろう。

タールオはそう思い込んでいた。

しかし、彼が幾ら嫌だ嫌だと反抗しても、両親が金を出してくれなければ、結局のところ何もできない。金がなければ生活することはおろか、予備校でもう一年、勉強することさえできない。タールオはそんな己の立場が非常に悔しく、同時に金を武器にする親が憎かった。

そんなふうに、親に依存することが耐えられないのなら、残された手段は一つしかない。即ち、それは周囲が言うように働くことだ。働いて、自分である程度お金を稼いで、貯蓄して、そのお金を持ってまた学園星（スコルスタ）バージーに行けばいい。いや、何も学園星（スコルスタ）をバージーに拘（こだわ）る必要はない。働きながら勉強して、奨学金試験のある予備校が存在する別の学園星（スコルスタ）へ移るのもいいかも知れない。

取り敢えず、今は働くことだ。

タールオは立ち上がった。そして、また歩を進める。

彼が向かっている先は、人工星（ステーション）セジアルドに存在している基地の一つだった。実家に帰ってすぐ、父親からその基地を紹介されたのである。その基地を別名、踏査開発機構拠点と言ったりもする。踏査開発機構とはその名の通り、宇宙に存在するまだ未知なる星を探索したり、他の星々と交流を持たぬ未だ開発の進んでいない星に、様々な知恵を授けたり積極的に交流を進めたりするための機関である。とはいえ勿論、タールオはその中で重役に就けるわけもない。恐らくはただひたすら上からの命令に従って、黙々と作業をこなすだけなのだろう。数多（あまた）いる作業員の一人として。要は、下っ端だ。

それはタールオの想像していたエリートとは懸け離れた職業ではあったが、この際それは仕方がない。彼は文句が言える立場にはいないのだから。

　タールオが暫く歩みを進めたところで、仰々しく聳(そび)える門が、遠くに見えるようになってきた。その門の麓(ふもと)では、大小様々な形の建物が半円状に立ち並び、ちょっとした町のようなものを作っている。

　あの町と門を過ぎたところが、セジアルドの踏査開発機構拠点となっている場所なのだろう。今はその巨大な門に隠されて、基地の内部は見えない。けれど、あの門の長さからして、広大な面積であることは間違いないらしい。

　空中回廊の窓からそれを見やり、思わず感嘆の息を漏らす。想像していたよりも、ずっと規模が大きい。更に、門の外にある町を抱くようにして広がるのは、豊かな森林だ。上から見ると、それは緑のマットを敷いたようだった。

　タールオは暫しそれを眺めていたが、やがてまた回廊を進み始める。そして、回廊の幅が膨れあがり広場になっているような場所にいきついた。そこには、先程まで歩いていたところのように、天井と側面を覆う透明の壁はない。落下防止の柵があるばかりで、外の空気に面している。更に、その中央には空中バスが低い震動音を奏でながら、数台止まっていた。

2―2

タールオはその中から、自分の基地行きのバスを探して、それに乗り込む。程なくして、車内にアナウンスが流れた。
『間もなく出発致します。シートベルトをご着用下さい』
アナウンスに従って、胸と腰の部分の二カ所にベルトを巻く。ベルトとはいえ、体をきつく拘束する作りにはなっていない。余裕があり、少し体を動かしたりする分には、全く支障がない。いざという時にだけ、締め付けるようになっているらしい。
バスの唸り声が、一段と大きくなる。それと同時に、ふうと自分の体重が突然軽くなったような、眩暈にも似た感覚が襲う。バスが空中回廊を蹴って、飛んだのだ。
窓を流れゆく景色が、目に心地よい。タールオは見るともなしに、それをぼんやりと眺めていた。
先程空中回廊の上から認められた基地は、随分遠くにあるように感じられたが、その距離はどんどんと縮まっていく。緑のマットのような森林が、徐々にその広さを増していき、木々の一本一本まで確認できるほどまで、近づいていく。
そしてそれを通り過ぎると、今度は奇妙な形の建物が連立する町の、その上空に辿り着いた。そこで、バスは少し高度を落とす。すると、反対方向からまた別のバスが、唸り声を上げて擦れ違っていった。
バスはまだまだ飛行する。
タールオは一つ溜息を落とした。
自分の想像した未来では、今頃、綺麗なキャンパスの中にいるはずだった。大きな講堂、高尚な授業、高度な訓練施設。自分の賢明さを讃(たた)える講師や学生達。可愛い女の子達の憧れの眼差し……。
だが、今はそんなものとは懸け離れた、汚い町の上をこうして飛んでいる。何という悲劇！

タールオは目を閉じる。これ以上、外の景色を眺めていると、気が塞いで仕方なかった。
そんな一人の少年の悲哀をよそに、バスは更に高度を下げ、黒光りする門に近づいていく。バスの目指す先は、ぽっかり穴が空いていて、中からは種々の移動用の乗り物が出入りしていた。そしてバスはその穴の中に、飲み込まれるようにして入っていった。

＊　＊

周囲は頭が割れんばかりの騒音で満ちていた。何かを削るような音、ぶつけるような音、間近で航空機が離着陸する音、プロペラが回る音……等々。成る程、ここまでうるさければ、あの分厚い鉄の門がある理由も納得がいく。
騒々しさに眩暈を覚えそうになりながら、タールオは指定された場所に突っ立っていた。事務で名乗り用件を告げると、真っ先にここに通されたのだ。それから暫く待たされているのだが、一向に誰かが来そうな気配もない。
とはいえ、タールオが退屈することはなかった。何しろ、辺りは見慣れないもので溢れているのだ。無数のランプが光るコンピューター、卵状の装甲車、濃緑色の制服を着た作業員達。
それらに呆気に取られていると、背後から声をかけられた。
「タールオ・アルス・デドセン君かな？」
名を呼ばれ、タールオは振り返る。そこには、黒ずくめの事務服を纏（まと）った長身の男が立っていた。肌色は青みを帯びていて、白目がない。ガジェスと同じ銀河団に属する種族の者らしい。
「はい、タールオです」
タールオが答えると、男は安心したように笑った。
「やあ、待たせてすまなかったね。……君は第十八部隊の許で働くことになったたよ」
「第十八部隊？」

「仕事の内容は、隊長に訊いてみてくれたまえ。今からそこに案内しよう」

促されるままに、タールオは男の後ろについていく。擦れ違う人間が、タールオの方を珍しげに眺めていた。

やがて、二人はある一角に辿り着く。そこには自分の背丈の何倍もある作業機が、何台も並んでいた。タールオはそれを見上げる。だが、作業機の背丈はあまりにも高すぎて、まともに見上げると首が痛くなった。

「セルフィードさん、セルさーん」

案内係の男が、声を張り上げる。だが、返ってくる声はなかった。

「あれ、おかしいなあ」

男は一人呟く。

二人の前に立つ作業機の頭の上から、カンカンカンと金属音がぶつかる音が響いている。何の音だろう、と首を傾げながら、タールオはその作業機をなおも眺め続けていた。

「セルフィードさーん！」

男がさらにもまして大声を上げた時、先程まで聞こえてきていた金属音がやむ。それと同時に、作業機の頭が開き、中から誰かが顔を出した。逆光で容姿は定かではないが、どうも小柄な人間のようだった。

「隊長ならちょいと出かけてるよー」

驚いたのはそれが女の声だったからだ。こんな馬鹿でかい機械の上で、何か力の要りそうな仕事をしている様子だったから、当然、男だろうと思っていたのである。

案内人は困ったように頭を掻く。

「あれ？　約束してたのに、忘れられたかなぁ」

「すぐ戻ると思うけど。何事？」

女は怒鳴るような声で――そうでもしないと、こちらまで声が届かないからだ――上から問う。案内人は答えた。

2―3

「新入りだよ。可愛がってあげな」

　すると、作業機の頭が再び閉じる。そして、側面から先程の女と思われる人物が、姿を現した。彼女は小さな足台の上に乗る。その足台には細い金属棒が取り付けられていた。続いて、彼女が近くにあるスイッチを押すと、金属棒が地面まで下がる。それから足台もその金属棒を伝って降りてきた。

　足台が一番下まで下がったところで、女はその上から降り立つ。彼女は小さな顔には不釣り合いな、無骨で大きいゴーグルをつけていた。

　こうして近くで見ると、やっぱり小柄だ。耳の下で切り揃えられた髪は、油か何かで汚れてくすんでいる。丁寧に洗って手入れをすれば、陽光を反射させる見事なプラチナだろうに、残念だった。

「へぇ……」

　女はゴーグルの奥から、しげしげとタールオを見つめる。そして、ゴーグルを頭の上に押し上げた。次いで現れたのは青緑色の瞳。やや吊り目がちの勝ち気そうなその目は、今は真っ直ぐにタールオに向けられていた。

　その視線の力強さに、タールオは居心地の悪さを覚える。

　女は口を開いた。

「珍しい、あたしによく似てるじゃん。もしかしたら同じ銀河団の人かな？　まあ、うちんとこのはちっこいから、正確には銀河群だけど。……あたしは局部銀河群ＧＲ８系のテラシアスタから来たの。あんたは？」

　彼女は覗き込むようにして、タールオの顔を見る。一方、タールオといえば硬直してしまっていた。

　断っておくが、これは断じて女が苦手だからというわけではない。ただ、自分の一族の出身の銀河団どころか、故郷星（コウットスタ）さえもを知ら

ないからだ。
どう答えたらいいのか考え倦ねていると、案内人が口を挟んだ。
「親睦を深めているところ申し訳ないけど、私はそろそろ用事があるので、デドセン君をここに残してもいいかな」
女はタールオから視線を外す。タールオは内心、ほっとした。
「いいよ。隊長は新入りがくるって知ってるんでしょ？」
「うむ」
「ならいいよ。あたしが伝えとく。お疲れ様」
案内人は微笑むと、タールオに向き直った。
「では、私はこれにて。ここでしっかり扱かれてくれたまえ」
彼は新入りの肩をぽんぽんと叩き、去っていった。
残されたタールオはどうしていいか分からず、女の方を顧みる。
女はそんな彼に気付いて、唇の端を吊り上げて笑った。
「そんな顔しなくたって、すぐ慣れるわよ。このあたしだって、今じゃ何とか仕事できてんだから」
「……君はいつからここにいるんだ？」
「去年から。だからずっと、あたしが一番下でさ、後輩ができて嬉しいわ。あんたで二人目よ」
どうやら、タールオの他にも、もう一人新入りがいるらしい。どんな奴かは知らないが、同僚がいるのは心強かった。
「取り敢えず、自己紹介といきましょうか！　あたしはカナリィ・テラシアスタ・ガットゲルドナリシア」
「カナリィ・テラシアスタ・ガッ……」
「ガットゲルドナリシア。舌噛みそうでしょ。あたしもねー、書類書くときいっつもこの自分の長ったらしい名前に苛々してんの。将来の結婚相手は、絶対短い名字の人にするって決めてる」
タールオは思わず吹き出す。すると、カナリィも笑った。
「で、あんたの名前は？」
「俺はタールオ・アルス・デドセン。宜しく」
カナリィは不思議そうな顔をする。

「アルス？　それ、どこの銀河団の何ていう銀河にある星？」
さっきと似たような質問をされてしまった。タールオは苦く笑う。
「ごめん、俺も実は知らないんだ」
「知らないの、自分とこの星を？」
「うん」
　カナリィは含み笑いをした。
「分かった、あんた故郷を持たない放浪者（バンデレル）の一族なんでしょう。たまにいるのよねー」
　彼女の指摘する通りだったので、タールオは頷く。カナリィは腕組みをして考え込むような顔つきをした。
「でも、あんたとあたし、よく似てるから、絶対同じ銀河群の人間なんだと思うけどなぁ。まあ、一概にそう言えないけど」
「局部銀河群？」
「そ。だとしたら、えらく遠いとこから来たもんねー」
やっぱり、という思いがタールオの中に広がる。人工星（ステーション）セジアルドからあまりにも距離がありすぎたために、知っている者がいなかったのだろう。
「君も遠いところから来たんだね」
　本当に自分が局部銀河群に属している種族なのかは別として、その似通った容姿に親近感を覚えて、タールオは思わずそう口にする。
今度はカナリィが苦笑いをする番だった。
「自分とこの小さな星にいたくなくてさ、十四の時に家飛び出してきたの。で、できるだけ故郷星（コウットスタ）から離れた学校選んで学園星（スコルスタ）を点々としてきたんだけどさ、何も身につかなくって。それでもこんなあたしを受け入れてくれたのが、セジアルドの基地だったってわけ」
「ふぅん」
「で、あんたは何でここで働くことになったの？」

2—4

「俺は親父の紹介で……」
「それだけ？」
「それだけ」
カナリィは青緑の目を瞬（しばた）かせる。
随分と安易だ――と、その双眸が言外に告げていた。
自分だって、好きでこんなとこに来たわけではない。お金がなかったから、仕方なしにきたのだ。そして自分でどこか仕事を探そうにも、タールオにはその伝手（つて）がなかった。
「ま、いいや。じゃ、ここが具体的にどんなことしてるかとかも、あんまり知らないんでしょ」
「未開発の星の探索、では？」
「そうそう、それは知ってたわけね。でね……」
ここでカナリィは扁平な胸の前で、両手で握り拳を作ってみせる。その青緑の瞳は、きらきらと輝いていた。
「今度、局部銀河群にある銀河の星の一つを探査するの。で、実はその調査隊に、あたしも入れてもらったの！」
どうやら、彼女は自分に与えられた任務について、誰かに自慢したくて仕方なかったらしい。
仕事の説明をするつもりではなかったのだろうか。
もっとも、タールオは特に興味も関心もなかったが。
「残念ながら、どうもあたしの故郷星（コウットスタ）からは離れた場所みたいだけれど、それでも何だか嬉しい！　……ああ、それにしても三年も家に帰ってないから懐かしいなぁ。みんな元気かなぁ」
カナリィは遠くを見つめるような眼差しをする。その面（おもて）には、ほんの少しの後悔が滲んでいた。
「三年前に十四歳で家出したってことは、君、十七歳？」
えらくしっかりした印象を受けたので、こう見えても自分よりも

年上だろうと思っていたから、タールオは少しばかり驚いた。カナリィは頷く。

「そうよ、あんたは？」

「俺は十八」

「……」

カナリィは口を噤む。何をどう感じたのか、その眉根は不快そうに寄せられていた。

ややあってから、彼女は人差し指をびしっと立てて、タールオにつきつける。

「あんた！」

「え、あ、はい！」

その声が鋭かったので、タールオは思わず背筋を正してしまう。そんな彼に、一つ年下の少女は口撃を加えた。

「自分が年上だからって、偉そぶってんじゃないわよ！」

いえ、別に偉そぶっているつもりは全くないのですが、とタールオが反駁（はんばく）するより先に、彼女は更に言い募る。

「あたしの星は十五で成人なんだから、こう見えてももう大人なの」

何歳で成人するかは、当然、心身の成長具合にもよるだろうが、そこの星が抱える文化的背景も大きく影響してくるはずだ。故に、年齢だけで大人であるか否かを分けるのは、正しくない。

それに、とタールオは思う。

自分で自分のことを「大人なの！」と言ったりする辺り、精神年齢が知れようというものではないか。

勿論、それをこの場で口にするほど、タールオは愚かではなかったので、ただひたすら頷く。

断っておくが、これは断じて彼女が素で怖かったから、というわけではない。

「それにねぇ、ここではあたしの方が一年先輩なの。上司なの！分かるっ？」

「はい……」

「だったら、その偉そうな態度を改めなさい」
偉そうな態度をしているつもりはないのに、年下の上司はそんなことを命令する。
その時だった。
「カナリィ、大声を出してどうした？」
野太い声が割って入ってくる。カナリィは声のする方を見やり、同時に顔を綻ばせた。
「あ、隊長！　お帰りなさい」
こちらに向かって大きく手を振る男は、長身だった。青みがかった肌、全てが瞳の目。
だが、タールオが目を見開いたのは、隊長らしきその男の容姿のせいではない。もともと、セジアルドはその種族の銀河団の人間が多いから、格段、珍しくもなんともない。
そう、タールオが見ているのは、隊長ではなかった。その隣にいる自分と同じぐらいの年齢の、若い男だった。
その若い男はタールオに気付くと、牙のような歯を見せて笑う。
「よう、タールオ、遅い到着だな」
「お、おま、お前……」
「何だ、友人の名前も忘れちまったか？」
男は、口を魚のようにぱくぱくさせているタールオの隣に立つ。
すると、カナリィが二、三度瞬きをした。
「何よ、知り合い？」
「はい、こいつは俺の大親友なんですよ」
言葉も失っているタールオに代わって、男が答える。彼は馴れ馴れしく、タールオの肩に手を置いた。それをタールオは乱暴に振り払う。
「何が大親友だ！　気色の悪いことを言うな、ガジェス」
「おう、やっと俺の名前思い出したか。随分時間かかったな。早くもボケが始まったか？」
相変わらずの余計な一言を披露しながら、大等科学校に進学した

はずのガジェスことガジェス・チク・ドウシヤは、にやにやと笑ってみせた。

3—1

「ねえ、あたし全然、納得できないんだけど！」
カナリィ・テラシアスタ・ガットゲルドナリシアは苛立ちのままに、モップをタールオに向かって投げつける。タールオはそれを受け取り、無言で船磨きを開始した。
しかし、それが尚更カナリィの癪に障ってしまったらしい。彼女は船の上から仁王立ちになって喚（わめ）いた。
「あたしが一年間、真面目に働いてきて、やっとやっと、調査隊に加えて貰えるようになったって言うのに、どうして新入りのあんた達まで、一緒に加われるのよ！　ねえ、これおかしくない？」
「人手不足ってセルフィード隊長は仰ってましたよ」
飄々とした態度で答えたのはガジェスだ。彼は真っ黒になった雑巾に視線を落とすと、それを近くのバケツの中に浸す。水が暴れる音が辺りに響いた。
「人手不足、ねぇ」
カナリィはまだ納得がいかないのか、不服そうな顔をする。タールオはそっと溜息を吐いた。
確かに、憧れの調査隊に、まだ入隊したばかりの訓練も満足にできていないような人間が加わったら、先輩としては面白くないだろう。だが、それを自分やガジェスに当たり散らすのは間違っている。そもそも、自分は調査隊に入ることを希望していたわけではなかったのだ。
タールオとガジェスが基地の第十八部隊で働くようになってから十日後、二人は隊長たるセルフィードに呼び出された。
タールオはその時のことに思いを馳せる。
二人が隊長室に入ると、セルフィード隊長は大きな椅子に腰掛け、笑顔で出迎えてくれた。彼が笑うと、その口の奥に隠された牙が見

え隠れする。以前、それとなくガジェスに聞いてみたら、やはり隊長もガジェスと同じ銀河団の人間ということだった。
　人工星（ステーション）セジアルドは、ガジェスやセルフィード隊長のような、綿状銀河団出身の人間がその半数以上を占めている。綿状銀河団は、セジアルドからほど近い距離に位置していた。というのも、セジアルド自体が、綿状銀河団に属する銀河の星々に住まう人間により、開発されたものなのである。従って、そこに住まう人種が綿状銀河団系の人種であるのも、当然のことなのかも知れなかった。
　そして綿状銀河団系人種は、人種の違いには寛容なのか、異種族に対して反感を持ったりはしない。そしてセルフィード隊長もそういった例に漏れず、実に親しげにタールオに接してくれた。
「いらっしゃい。忙しい中、呼び出してすまなかったね、まあそこに掛けたまえ」
　促されるがままに、タールオとガジェスは、簡素な作りの丸椅子に腰掛ける。背もたれがないのが若干辛かったが、こうやって座らせてくれるだけでも有り難かった。
　一個隊の長でありながら、尊大な態度を取ったりしないこの体長に、タールオは好感を覚えた。
「さて、突然だが、我々第十八部隊が今どんな任務を与えられているか、知っているかね？」
　セルフィードはそう切り出した。
　タールオとガジェスは顔を見合わせる。そして、タールオは以前、カナリィが言っていたことを思い出し、口を開いた。
「局部銀河群の調査、ですか？」
　セルフィードは頷いた。
「そう、更に詳しく言うと、局部銀河群MW系ディアドスタの調査を任せられている」
「死の星（ディアドスタ）……」
　不吉なその星の名称に、タールオは眉を顰（ひそ）める。
「別称、黒の星、と言ったりもするな。とうの昔に、死んだとされ

る星だよ。正確には死にゆく星、か。……実は君達二人にも、その調査に同行してもらいたい」
タールオは息を呑んだ。
その名から察するに、ただ荒れた大地のみが広がる生命の存在すら怪しい星なのだろう。よもや、入隊してからいきなり、そんな物騒なところに派遣されるとは想像だにしていなかった。
「待って下さい、俺たちは訓練もまともに受けてないし、そこに調査に生かされても、満足な結果を持ち帰ることができるかどうか……」
危険地帯にできるだけ赴きたくなくて、タールオは尤もらしいことを口にする。
するとセルフィードは笑った。
「訓練なんて、自分を安心させるためだけのものに過ぎん。実力というものは、実践を積み重ねて初めてつくものだ」
無茶苦茶な言い分だった。
冗談ではなかった。
もともと、タールオはこの仕事に就きたくて就いたわけではない。適当に働いて、適当に稼いで辞職しようと思っていたから、就職してから一番初めに与えられた任務が、そんな危ない仕事だなんて、本気で勘弁して欲しかったのだ。
「いや、俺には無……」
理です、とそう続けようとしたのに、それは遮られてしまう。隣に座っていた幼馴染みが、突然立ち上がったのだ。
「隊長！　感激です！　こんな入隊して間もない自分たちに、そんな重大な任務を任せて頂けるなんて」
タールオは唖然として、友人を見上げた。
ガジェスはそのアーモンド型の両目に、涙すら浮かべていたのだ。

3―2

「おお、引き受けてくれるかね！」
セルフィードは顔を綻ばせる。ガジェスは激しく首を縦に振った。
「勿論でございます！　……なあ、タールオ！」
「え、あ、うん」
反射的に頷いてしまい、そしてしまったと思った。けれど、後悔した時は既に遅し。セルフィードは手を叩いて喜び、ガジェスと握手なんぞを交わしていたのである。もはや前言撤回できるような状況ではなかった。
「いやあ、良かった良かった。実はうちの隊は人手不足でね、ちょうど困っていたんだよ。君達のような若い力があると、私も心強い」
どうやら、タールオやガジェスがその実力を見込まれたわけではなく――もっとも、ほんの十日で実力を見極めることなど不可能に近いが――、ただ単に働き手がいなかっただけらしい。
タールオは一人静かに絶望した。
かくして彼は、ディアドスタの調査隊に組み込まれることになってしまったのである。

タールオは嘆息する。思い出すに、気が滅入って仕方なかった。
しかし、カナリィはその調査隊に自分が選ばれたことが、誇らしくて仕方なかったらしい。だからこそ、そこに新入りが加わることが許せないのだ。
彼女は口を尖らせながら、ブラシで船を洗っていた。そして、ある程度磨き上げると、船の側翼に向かって飛び降りる。
「危な！」
思わず叫んでしまったのは、一歩間違えればそのまま落下してしまうからだ。彼女がいるところから地面までは、かなりの高さがある。

「大丈夫よ、慣れてるもん」
カナリィはどこか得意げにそう言うと、また船磨きに取りかかる。慣れている、ということはいつもこんなふうにして掃除をしているのだろうか。それはそれで心配な気がする。
半ば呆れながら、タールオもまた自分の仕事に取りかかった。
彼等は今、まさに調査に向けての準備の真っ最中だった。そして磨いているこの巨大な船こそが、探査船なのである。
三人の他にも、沢山の者が必死になって船を磨いている。とにかく、この船は大きい。乗組員は十五人用と、決して大人数が入る構造にはなってはいないのだが、なにぶん、探査のための機械や、付属された小型機等が積まれているのだ。もう既に半日近く洗っているわけだが、一向に終わりそうになかった。
もっとも、タールオのように実際、この船に乗る予定の者は、まだ掃除のし甲斐もあるというものだからまだいい。だが、ここで船磨きに取り組んでいる者の中には、今回の調査隊に選ばれなかった者もいる。それ故に、若手であるタールオやガジェス、カナリィの三人は、さっきから刺すような視線やあからさまな嫌味の言葉を投げつけられていて、どうにも気分が悪かった。カナリィがタールオやガジェスに辛く当たるのも、或いはそれが原因の一つにあったのかも知れない。
「今回の調査は、期待できそうにないなー」
「何しろ、普段より三人、船員が少ないからな」
すぐ近くから、そんな会話が聞こえてきた。
聞くな、聞かないようにしろ。自分の仕事に集中するんだ。
タールオは手にしたモップに力を込める。水を含んだモップが、鈍く擦れて鳴く。
「給料貰って物見遊山できるんだから羨ましいわ」
「さすが、お父様のコネで就職したお坊ちゃんは違うねー」
心ない中傷は、容赦なく浴びせられ続ける。タールオはたまらなくなって、声のする方に顔を向けた。

彼の視線に気付いた男二人は、悪意に満ちた笑みを浮かべて、その場から離れる。タールオの耳には、鼓膜にざらつく嘲笑が残った。

タールオは唇を噛み締める。

そんなにこの船に乗りたいのなら、代わってやりたいぐらいだ。

そもそも、自分がこういうことになってしまったのは。

近くで掃除に励んでいる幼馴染みの方を見る。ガジェスとて、周囲の陰口を不快に感じていないわけではなかろうに、彼は鼻歌まじりに手を動かしていた。

「何だ、怖い顔をして？」

不意にその手を止めて、ガジェスがこちらを見返す。その時になって初めて、タールオは自分がガジェスを睨んでいたことに気付いた。

「別に……」

タールオは黒ずんできたモップを、バケツにつけて洗う。そんな彼に、ガジェスの半分怒ったような声がかけられた。

「別にってことはないだろ。何か言いたいことがあるなら言えよ」

タールオはモップを絞り、口を開いた。

「お前、大等科学校に進学するんじゃなかったのかよ。何でここにいるの？」

固く絞ったところで、手を放す。匂いのする水が、指の隙間を伝って落ちていった。タールオは手を振ってそれを落とす。

「んー、大等科学校に行く前に、何かしてみたいと思って。勉強だけで終わりたくないんだよね、俺。そしたらお前が、この基地で働く予定ってことを、お前の親父さんから聞いてさ。それならついでに俺も入れさせてもらおうと思って、入学してからすぐ、休学届け出してきた」

ガジェスは笑う。

3—3

それに対してタールオは、信じられない、と首を横に振った。

こいつは馬鹿なのではなかろうか、と本気で思った。

予備校であれだけ勉強して決まった入学を、自ら延期させるとは。この自分は、入学したくてもそれができなかったというのに！

タールオは再び口を開いた。

「お前は俺のストーカーか。……だから、危険な仕事も厭わないってわけ？　嫌われても？　そんなことに時間を費やすのが、アホらしいって思わないのか？」

どうしても、語調が険のあるものになってしまう。

こうして働いて過ごしている時間が、タールオにとっては無駄なものに感じられて仕方がなかった。

「まー、そういうこと。……何、お前、嫌なの？　自分の知らない世界に行けるんだぜ！　それって凄いことだと思わないのか？」

「別に」

「だったら、隊長に言って調査隊から外して貰えばいいだろ」

「別に。いいよ、もうどうでも」

タールオは再び船磨きを始める。何だよ、拗ねるなよー、という声が聞こえてきたが、これは黙殺した。

そのまま二人の間に気まずい沈黙が流れる。だが、それは唐突に破られた。二人の頭の上に、何かが降ってきたのだ。

「いて！」

「な、何だ？」

二人はほぼ同時に声を上げる。落ちてきたのは、紙包みにくるまれた菓子パンだった。

「疲れたでしょ、あたしの奢りよ。先輩なんだもの、これぐらいはしなくちゃ！」

得意げにそう宣(のたま)うのは、カナリィだ。見ると、彼女の手にも既に

歯形のついた菓子パンが握られている。
「……パン一個で先輩面されてもなぁ」
ぽつりと呟くと、今度はブラシが降ってきた。タールオは身を逸らしてそれを避ける。ブラシは、かんかんと反響音を鳴らして落下していった。
「もう、ほんっとあんたって可愛くない後輩ね！　素直にお礼言ったらどう？」
「はいはい、すいません。ありがとうございます」
「それで宜しい」
満足げに頷くと、カナリィは近くの足台に乗って、タールオの傍まで降りてくる。彼女はそのまま、タールオの足許に座り込み、パンを勢いよく頬張り始めた。膨らんだ両頬がリスのようで、こうして見るとなかなか可愛らしい。
「……何よ」
じっと見つめていると、青緑の勝ち気な瞳に睨まれた。
「いや、別に……。随分、美味しそうに食べるなって、思……いまして」
語尾に詰まってしまったのは、途中で慌てて丁寧語に切り替えたからだ。どうしても、カナリィの容姿や態度が幼いせいで、先輩ということを忘れがちになってしまう。
カナリィは、ごきゅりと喉を鳴らして、口の中のものを飲み込んだ。
「だって美味しいんだもの。ほら、あんたも食べなさいよ。……それと、敬語使わなくていいから。なんか逆に気持ち悪い。実際、あんたの方が年上なんだし」
つい先日、年下であることを気にして侮られまいとしていた少女は、そんなことを言う。タールオは意外な心持ちがした。
だが、すぐに思い直す。
ここ暫く、この第十八部隊をみていたが、自分たちと同年代の人間は他にいそうもなかった。実際、カナリィは、タールオとガジェ

スがくるまで自分が一番下っ端だったと言っていた。それならば、ずっと親しい人間もできなくて、しかも誰も彼もが違う種族で、今まで孤独を感じていたのかもしれない。
だとしたら、先輩でも後輩でもない、ただの友達が欲しかったのだろう。
——しっかりしているように見えて、本当は寂しがり屋なのかなそんな思いがよぎる。
そして彼女が買ってきてくれた菓子パンを口に含んだ。そして。
「甘！」
舌が麻痺しそうになるぐらいな、強烈な甘さに、タールオは呟き込んだ。
「疲れた身体と心には甘いものが一番！」
彼女は白い歯を見せて笑った。その笑顔がやたらと眩しく感じた。
疲れた身体と心。
もしかしたら、周囲の誹り（そし）を受けているタールオやガジェスに対して、彼女なりに気を遣ってくれたのかもしれない。
タールオは不器用な優しさを持つ少女の方を見る。早くも平らげてしまった彼女は、指先についた粉砂糖を舐めていた。
「ねえ、知ってる、この船の名前？」
彼女は、唇を舌でぺろりと舐めて綺麗にしてから、そう問う。
タールオは馬鹿でかい船を一通り眺め、そして首を振った。
「いや」
「『ＲＩＳＥ！（ライズ）』って言うの」
カナリィは機体に指で文字を描く。その文字の形は、タールオが知っている共通語（コモン）に似ていたが、少しばかり丸みを帯びているように見えた。
「ライズ……」
タールオは鸚鵡返しに繰り返す。カナリィは頷いた。
「そうよ、あたしが名前つけたの。隊長が、いいねって言って採用してくれた」

「どういう意味？」

3—4

「……昔の言葉で、しかも一部の地域でしか使われていなかったらしいから、よく知らない。でも、『上昇する』って意味らしいよ。人間の向上心を象徴して名付けてみた」

金髪の少女は、油で汚れたその髪をくしゃりと握って、照れたように笑う。

「最後の『！（エクスクラメーション）』は？」

「人間の強い意志そのままに、意欲そのままに」

「なるほどね」

いい名前だな、とふと思った。

だがそう言う前に、カナリィは立ち上がってしまう。

「はい、休憩終わり！」

彼女はひらりと身のこなしも軽やかに、足台の上に飛び乗った。

タールオは慌ててそれを呼び止める。

「えと、あの」

「ん？」

「パン、ありがと」

するとカナリィは少しだけ目を見開き、続いて破顔した。

「お礼は二回も言わなくていいのよ」

そう言いおいて早くも自分の持ち場につくと、彼女は仕事を再開した。

1—1

宇宙船ライズが出航する前の最後の晩。
人工星（ステーション）セジアルドは満天の星空だった。霞がかかることなく、虚空に散らばる星々は忙（せわ）しなく瞬いている。その光景は、夜勤で疲れている者の心を癒した。
彼は星空に心を奪われながら、暫し仕事を忘れていた。だが、すぐに現実に引き戻される。同僚の一人が素っ頓狂な声を上げたからだ。
「あれ？」
「どうした？」
彼は同僚の傍に歩み寄る。同僚はエネルギーセンサーを抱え、そして不審そうな顔をしていた。
「いや、これ見ろよ」
言われるがままに、センサーに視線を落とす。センサーに取り付けられた十二のランプのうち、一つが赤い色に点滅していた。
「どこか異常？」
センサーの端子は、小型機の一つに接続されていた。彼らは今、宇宙船ライズに付属する小型機の最終点検を行っている最中なのだ。
彼は同僚からセンサーを受け取り、そこに表示された数字に渋い顔をする。
「どこからか、熱量が漏れてるな。何だろう、抵抗装置の異常か？」
彼は一度端子を外し、更に小型機の側面を剥がして、エンジンを露出させた。そして内部を点検したが、中の部品がショートしていたり、接続不良となっていたりしている箇所を見つけることはできなかった。また抵抗装置の方にも、異変は認められなかった。
彼は首を傾げ、もう一度センサーの端子を取り付ける。今度はランプはすべて緑色に光っていた。
「何だったんだろう」

彼は怪訝そうな顔をする。そしてそれは同僚も同じだった。
「まあ、心配ないだろ。それにこいつは補助機（サブ）だし、実際使うことは殆どないしな。今度の調査が終わってから、本格的な点検に出せばいいさ」
彼は同僚に言う。同僚も頷いた。
そして再び、開けた蓋を閉じる作業に入る。
どこか遠くから、夜鳥の啼く声がしていた。

＊　＊

基地の外れで、最後の点検が行われていた頃、ガジェス・チク・ドウシヤは浮かない顔で隊長室にいた。鬱々とした気分を振り払うべく、出された珈琲（コーヒー）を口に含むと、香ばしさがいっぱいに広がる。こんなものを夜に飲んでいたら、寝付けなくなるな、と内心思いながらも、ガジェスはついついそれを口に運んでしまう。彼は珈琲に目がないのだ。その独特の香りと、余計な甘さのない強い味が、彼は好きだった。
だが、これ以上飲んだら、本当に眠れなくなってしまう。それでなくても、明日はいよいよ調査に出発するのだから、ゆっくり体を休めないといけないというのに。
彼がそう自分を戒めたのを見計らったように、扉が開く。現れたのは第十八部隊の隊長であるセルフィードだった。
ガジェスは慌てて椅子から立ち上がる。
「夜分、お疲れ様です、隊長」
「君もお疲れ様」
ガジェスと似たような容姿のその男は、ゆったりとした笑みを浮かべながら、目の前に座る。ガジェスもそれに倣った。
「君はまだ悩んでいるようだね。若いうちからそんなだと、早くに禿げるぞ」
セルフィードは軽口を叩く。ガジェスは少し笑んだ。だがそれは、

ちゃんとした笑みにはならなかった。彼は心の中に凝りのようなものを抱えていたのだ。
「隊長、これで良かったんでしょうか……」
つい、また珈琲を口に流してしまい、それをしまったと後悔しながら、ガジェスは言う。セルフィードは苦笑した。
「おいおい、そんな顔をしてくれるなよ、もともと君たちが言い始めたことじゃないか」
ガジェスは俯く。空になったカップの底に、自分の顔が歪んで映っていた。
「でも、俺はちょっとだけ迷ってます」
「いずれ、彼は知らなければならないことだ」
ガジェスは顔をあげる。セルフィードの真摯な眼差しとぶつかった。
セルフィードは立ち上がり、窓に歩み寄る。窓の外は暗い闇を背景に、基地の灯りが星のように煌めいていた。
「君の父親と、デドセン君の父親とは親友でね。この話は以前したかな？」
「はい、伺いました」
「その親友殿の頼みなら、無下にするわけにもいかんだろう」
ガジェスは口を噤む。そして自分の幼馴染みのことを思った。
ガジェスにとって、タールオは友人というよりも家族に近い。というのも、タールオの父親は始終忙しく家にいないことが多いため、タールオは幼い頃からガジェスの家に預けられることが多かったのだ。勿論、タールオには母親がいたが、当時は生活に苦しかったのか、母親も働きに出て昼間はいないのが常だった。また、タールオがガジェスの家に預けられるのは、二人の父親が友人同士であるという理由もあった。

1―2

　そしてガジェスは、自分の父親とタールオの父親、セルフィードの三人がどこで知り合ったのかも知っている。彼らは以前、この基地の同じ部隊に所属していたのだ。更に、その三人がどのような仕事に携わっていたのかも知っていた。
　もっとも、ガジェスの父親は今は足を悪くして辞職しており、室内でできる別の仕事に就いている。しかし、タールオの父親の方は、まだ嘗ての仕事と繋がることをしていると聞いている。とはいえ、よその家のことなので詳しく知っているわけでもなかったが。
「大いなる宇宙の意思というものがあるのなら……」
　セルフィードは口を開いた。
「その意思が、デドセン君に猶予を与えたのではないのかな？」
「猶予？」
　ガジェスは不審げに眉を顰めた。窓に映ったセルフィードと目が合った。
「大等科学校に進む前に、彼が見て、そして知るための猶予だよ。現に、君たちの父親はその猶予を利用して、デドセン君をここに送り込んだじゃないか。……デドセン君が今回の旅で経験することは、そのまま彼の血となり肉となるだろう」
「そうですね……」
　ガジェスは大きく息を吐く。そしてカップに残った珈琲の残りの一滴を啜った。だが、その冷えた一滴は、喉を潤すのにも心を潤すのにも足りなかった。ただ、酷く苦い味だけが残った。
　セルフィードは振り返り、また椅子に腰掛けた。彼は安心させるように大きな笑みを浮かべてみせる。
「何も心配する必要はないよ。今回の調査は私も同行するしね」
「何だかすみません……」
「なに、基地に引きこもっていると脳が腐ってしまう。たまには外

に出んとな。……しかし、お目付役の君も大変だな」
ガジェスは眉を上げる。そして首を振った。
「俺がタールオについてきたということと、あいつの友人でいるということは関係ありませんから。……それに、調査隊ってのに個人的に興味があったってのもあります」
それは嘘ではなかった。
大等科学校に進学する前に何かしてみたい、と思っていたのは事実。そんな時に、この話が舞い込んできた。自分もタールオと共に調査隊に入ると言うと、母親は心配したが、父親はむしろ喜んだ。きっとそれは、友人の息子のことを気にかけていたからという理由だけでなく、自分の息子が、足を失った自分と同じ道を歩もうとしていることが嬉しかったというのもあっただろう。
「そうか。デドセン君はいい友人を持ったな」
セルフィードは微笑む。
自分のことを高く評価されたはずなのに、しかしガジェスは心の奥にある染みを完全に拭い去ることができなかった。
タールオが今回の調査行きを望んでないことは知っている。仕事を適当にしようとしていることも、何となく感じ取れる。だからこそ、不安があった。彼のその要素が、何らかのよくない事態を引き起こすのではないか、という危惧があった。
ガジェスは手にしたカップを机に置く。
そして結局、珈琲を飲み干してしまった自分に気付き、今夜はやはり眠れそうにないな、と心の中で苦笑した。

2—1

窓の外には無限に広がる虚空がある。実は有限であるとの説が最近は一般的であるが、その世界の果てに行った者がいないので、それは定かではない。
　その虚空に広がる星の位置が少しずつずれていくので、やはりこの船は進んでいるのだろうな、とタールオは思う。星間を移動する時はいつも思うのだが、星上と違って北も南も、西も東も、上も下もない世界を泳ぐ船は心許ない。何をどう道標としているのか、そもそもこの空間の中を「移動する」という概念が通用するのか、不思議な気分になってくる。
　頼りなく、遙かな世界をふらふらと泳ぐ船。それはそのまま、まるで今の自分の状態のようで、タールオはそんな自分の思いつきを少し笑った。
「何、一人でにやついてんのよ、気持ち悪い奴ね」
　背後から声をかけられ、タールオは振り返った。そこにいたのは金髪の髪に青緑の瞳をした少女。彼女の腕には分厚い袋が下げられていた。
「ほら、あんたが知りたいって言ったから、あたしちゃんと調べてきたんだから」
　そう言って、少女——カナリィは袋の中から、平べったい板のようなものを十数枚取り出す。タールオは目を丸くした。
「え、本当に調べてきたの？」
　タールオたち第十八部隊の今回の派遣先——局部銀河群ＭＷ系ディアドスタ。死の星、黒の星とも呼ばれるそこは、しかしタールオやその他の仲間達も、詳しい知識を持たない本当に未開の地だった。
　タールオが予め知らされたのは、『死の星』と言われてはいるけれど、実際は何らかの生命が存在しているらしいということ。そこの大気は有毒であり、防護服なしでは体を害してしまうということ。

しかし、酸素がないというわけではないこと。厚い雲の層に遮られていて、光が殆ど差さないこと。そのために、極寒の地と言っても過言ではないということ。水は有害物質を多量に含んでいるために、決してそのまま飲んではいけないということ。それだけだった。

だが、それだけでは情報としては不足している。故に、タールオは「何か現地で役立つデータはないかな」と、カナリィに漏らしたのだ。何しろそこは、その名の通り『死にゆく星』なのだ。危険に備えて情報を欲するのは至極当然のことだった。けれど、別にそこまで真剣だったわけでもない。特に期待もしていなかった。自分よりずっと以前から部隊に所属する者たちですら知らないのだから、情報らしい情報なんて出回っていないのだろう。だからこそ、自分たちは調査に行くのだから。

しかし、カナリィは何かを調べてきてくれたらしい。彼女は持ってきた板を広げ、映像を映しだした。タールオはそれを覗き込む。二人の顔は板上の映像に照らされ、青白く光っていた。

カナリィは何かを打ち込む。すると、そこには岩石ばかりが転がるモノトーンの大地が現れた。

「これがディアドスタの写真？」

タールオが問うと、カナリィは頷いた。

「そうよ」

その光景はまさしく『死の星』の名が相応しい。色彩に乏しく光に乏しく、生命の気配がまるで感じられない。どこまでも続く乾いた荒れた大地。

「よくこんなの手に入ったな」

カナリィはちょっとだけ得意げに笑んだ。そして、自分が仕入れてきた情報を披露し始める。

「実はディアドスタのすぐ近くに、ワームホールの出口が作られたのは、つい最近のことじゃないみたい。私達が生まれる何十年も、下手したら百年以上前に、それはあったみたい」

ワームホールというのは、宇宙の中に存在するホールとホールを

繋ぐ通路のことである。簡単に言えば、片方のホールは巨大な重力でもって全てを飲み込み、もう一つのホールに向けて一瞬にして吐き出す。ホールとホールの通路は空間を歪ませ、異なる次元を通して繋がっている。宇宙での旅はこれを利用してワープを行う。まともに星間を飛んでいたのでは、ミイラになっても目的地に到着しない。故に、人工的に超新星爆発を起こさせ、ワームホールが造られるようになったのだ。勿論、あまりにもでかいホールを四六時中置いていたら、空間を歪め他の星々を破壊してしまう。従って、入り口と出口に置かれるホールは、小規模なものを一瞬だけ――内部を船が通る間だけ――発生させるようにしてある。勿論、ホールを造るたびに入り口と出口の位置が変わってしまったら困るから、基となる経路が計算され、それを促すように穴が開けられる。その穴を開ける装置はどこにでもあるわけではなく、それぞれの星の行き先によって設置されていた。言ってみれば、バス停のようなものだ。そしてタールオらは、現在そのバス停に向かって船を泳がせていた。

しかしそのディアドスタ行きのワームホールは、昨今増設されたものではないらしい。ということは、自分たちが調査する前に、他の者もディアドスタに行ける機会があったはずだ、ということだ。

驚くタールオの隣で、カナリィは続けた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5259y/

RISE!

2011年11月20日03時22分発行